

日本の通信業界の現状

川島 幸之助 (NTTアドバンステクノロジー, トラヒックセンタ所長)

1998年12月9日 於 学士会館

12月の丸の内OR研究会は通信業界の情報を最も豊富に捕らえているNTTアドバンステクノロジーの川島氏に通信のビッグバンと言われる最近の業界の大きな変化についてお話しをして頂いた。

【要旨】

1985年に通信の自由化が施行され、競争原理が導入されて第1種事業者、第2種事業者の区別ができ、またNTTが民営化されて第2電電などNCC (New Common Carrier) と呼ばれる数社がこの通信業界に参加した。その後企業の間には社会情勢に応じた編成替えもあったが、この自由化によって業界には大きな変化が生じることになった。まず通信料金の低下で、平日、昼間、最遠距離3分間の通話料金は1987年に400円であったものが今年2月には90円になり、また国内専用線の東京-大阪間の料金はほぼ7分の1にまで低下した。競争環境が作られた結果とあってよいであろう。第2の変化は携帯電話の普及である。携帯電話は1994年頃まではゆっくりとした成長を示していたがPHSの実用化が始まると95年から98年11月の間に500万件から3800万件へと急速に伸びていった。端末の小形化とともに携帯電話から加入電話への通話料が4年前に比べてほぼ40%にまで下がっていることが大きな原因であろう。一方初期に好調だったPHSは97年9月ごろの700万件を頂点として減少を始めたが、最近減少幅が鈍化する兆しを見せている。

第3の傾向はインターネット需要の増大である。インターネットに接続されるホストコンピュータの数は全世界で98年にはほぼ3000万台に達しており、ここ数年

の年間成長率は100%に近い。そうしたなかで日米間のインターネット回線容量も急速に増大し、96年には電話回線の容量を凌駕し、97年末にはその6倍にもなっている。国内ではCATVがインターネットの回線として使用される傾向も見逃すことができない。今後はデジタル化の進展とともに通信、CATV、そして放送の世界はその融合を見ながら急速に変化していくであろう。

お話し後の恒例の質疑には1時間余りの間にPHSの性格、携帯電話の使用状況、ポケベルの傾向、CATVとインターネットなどが話題になった。通信業界のこうした事情は新聞などで断片的に目に入るが、こうして全体を総括的に眺めたお話しを聞くとその変化の大きさに驚くばかりである。イリジウム計画の実用も間近であり、インターネットもさらに普及してテレビ電話の役割を果たすことになるであろう。あと10年を経たときにもう一度川島氏のお話しを聞くとしたらそのときにはどのようなことになっているのであろうか。想像するのも難しい。(文責 斎藤嘉博)

事情によってしばらくレポートが中断していましたが今月から毎回のお話しの概要を掲載します。

【予告】

2月10日(水) ホワイトカラーの日米生産性比較; 草間徹氏 (トーマツコンサルティング, シニアマネジャー)

3月はおやすみ。4月以降のプログラムは3月号に発表します。来年度も10回のお話しを予定しています。